

岩を嚼む如く、和みては朝日に匂ふ櫻花の如く種々に萬化變現して光輝比類無き三千年の歴史を造り上げたのである。實に日本精神こそ世紀の羅針、人類の指導原理にして、建國以來の理想たる八紘一字の實現は正しく之れによるものである。日本精神の伸暢する處必ず正義を生じ、飽くまでも暗雲を掃滅し、邪惡を破壊して理想郷を建設せずにはおかない。

然らば日本精神とは如何にと云ふに、智仁勇の三徳を以て重要屬性とする處の不滅の根本思想である。之れを宗祖の御人格に就いて見るに、その生涯は日本精神の体现そのものである。

末法淺季の雜亂極りなき邪法の迷雲を排して、釋尊の本懷たる眞如の月を觀得されたるはこれ日本第一の智慧であり、一切衆生の苦惱を御自身一人の上の苦惱として正法を弘通し、救済の大慈を垂れられたるはこれ仁心であり、時の爲政者執權をも孤島の王と罵りて、斷罪流謫等の重疊たる迫害にも屈伏せず、遂に自己の大信念を貫徹されたるはこれ勇氣である。

即ち我が祖の全人格そのものが日本精神の權化である。

西溪御草庵に於ける九ヶ年の御垂教は稍下りて西谷檀林の講説となり、法水脈々として傳へられて六百數十年、此處に祖山教學の殿堂の發展を見たのである。されば我等祖山學徒こそ、正に宗祖の魂魄の相傳者である。即ち法華經の眞髓は即宗祖の魂魄、宗祖の魂魄は即我等胸中の一念であらねばならぬ。宗祖の御慈愛に抱かれ乍ら行學の二道に精進せる我々學徒の將來には、佛使と云ふ大任が課せられて居る。我等は自己の使命を的

確に認識し、自重自誠して自分の達成に邁進せねばならぬ。然してその前途には幾多の障害が横たはり、之れを突破して初志貫徹を果たすには智仁勇の三徳に依據することを必要とする。我等は自分の貫徹を以て理想實現の極地とし、理想實現の助成を以て本會の本分とするのである。實に本會の存在意義は此處にある。

本年度も既に終りに臨み、會務も大過無く大半を果し、尙着々として遂行されつゝあるが、これ偏に會長親下を始め各部長諸先生並びに先輩諸師、會員諸兄等の御後援に依るものにして全く我等一同の微力の能く致す處に非ず。茲に甚深の謝意を捧げる次第である。(田村生記)

各部記事

◆庶務部

幹事 田村啓孝

四月廿一日 上掲の如く選出されたる吾等一同は各部の事務引續ぎに忙殺されつゝ、舊新幹事一体となり、萬端の準備をなしつゝ、定期大會を待つ。

四月廿七日 學院教授今村先生正慶寺に晋山せられ、下邨庶務幹事その式に列し祝意を表す。

四月廿九日 先輩葛原榮靜師晋山せられ祝電を發す。(以上の

部業は舊新幹事不可分の間に行はる)

五月三日 第廿八回同窓會定期大會を本學院の講堂に於いて開催す。午前九時、振鈴、下邨庶務幹事開會宣言、次に今村教授副會長代理として訓辭あり。次いで議長は福島教授副議長は望月(舜勝)教授と決定し、直ちに正副議長の就任挨拶あり。次に各部の経過報告、質議全く無し。依つて舊幹事を代表して下邨舊庶務幹事の解任挨拶あり、此處に昨年度會務の終了を劃す。引續いて新幹事を代表し田村新庶務幹事の就任挨拶あり。次に田村庶務幹事の本年度豫算案の説明。豫算討議に於いて若干の質議應答あり。建議案討議に入り二三會則の變更をなす。

一、文學部會則ノ出版圖書ノ二部中圖書部ノ細則無キ故之レヲ削除スルヤ否ヤノ建議ニ對シ、二部保存、圖書部細則ハ委員附托ト決定ス

二、中學林生ハ助手幹事ノ被選舉權ヲ有スト決定ス
三、中學林生ハ基本金ノ使用權ヲ有スト決定ス

次に緊急動議無し。直ちに希望案討議に入る。若干の提案あり、それぞれ善處することゝなる。こゝに議事萬了し、議長福島教授の解任の挨拶あり。最後に田村庶務幹事の閉會の宣言に依つて大會を終了す。振鈴、時に午後零時二十分。

左に前年度幹事の芳名を列記し、一ヶ年間に於ける多大の功績を讃へ、同時に滿腔の感謝を捧ぐ。

庶務部 (幹事長) 下邨 顯 淨君

會計部 幹事 田村 啓孝君

文學部 幹事 熊谷 海善君

辯論部 助手 米澤 是忠君

運動部 幹事 清水 文要君

購買部 幹事 竹谷 榮靜君

幹事 香川 英頂君

助手 上田 玄忠君

○月〇日 先輩四辻宣有師出征に就き祝電を發す。

五月五日 副會長各部長に御慰勞を捧呈す。

○月〇日 會員中村重雄君出征に就き淨資を捧呈し、竹谷幹事

歡送す。

五月六、七日 山門前にて映畫並に道路布教をなす。(辯論部參

照)

五月十一日 昨年度卒業生記念寫眞成り、卒業生諸兄に發送す

五月十二日 修學旅行に就き學院當局と會談す。(運動部參照)

五月十三日 前幹事に御慰勞を捧呈す。同日監査員の候補者を

選舉す。

五月十五日 監査員を選舉す。左の六君なり。

田中靜光君 細井利行君 三枝光純君

鈴木新二君 前田超光君 田村啓孝君

同日旅行の件學院當局より許可せらる。(運動部參照)

五月十六日 辯論部幹事佐野海山君病氣の爲辭任し、即日後任

幹事として酒井圓通君を立つ。

五月十八日 文學購買兩部の候補者を選定す。同日立正中學より先生以下約九十名の旅行生が參詣し、田村幹事宿所たる武井坊を訪問して挨拶を陳ぶ。

五月十九日 早朝より立正中學生本院に登詣し、田村幹事之れが案内に當り、諸堂巡拜後接待に努め勞を構ひ、歸還に際しては田村、酒井、鈴木三幹事歡送す。

五月二十日 文學、購買兩部の助手を選擧す。

五月廿一日 校内臨時庭球大會を開催す。(運動部參照)

五月廿四日 修學旅行に對し補助金を進呈し、其他旅行準備に就き各幹事盡力す。

五月廿五日 旅行生出發し、幹事としては竹谷、鈴木兩君が參加す。(運動部參照)

○月〇〇日 會員増田能成君教育召集終了後直ちに出征して歸山せず、淨資並びに旗代を送り祝電を發す。

五月廿九日 旅行生歸着す。

五月三十日 池上學林より雄辯大會辯士の派遣を請はる。

六月二日 旅行費決算表を發表す。

六月三日 結城瑞光師の講演あり、全學生臨時休業して聽講す。

六月七日 午後一時本山大客殿に於いて全國「青少年學徒ニ下シ賜ハリタル勅語」の奉戴式を舉行せらる。

六月十日 第一學期校内雄辯大會を開催す。(辯論部參照)

六月十四日 本年度大會に決議された文學部の一部たる圖書部復活さる。(文學部發表)

六月十五、六、七日 開闢會に際し山門に於いて映畫並びに道路布教をなす。(辯論部參照)

六月十八日 春季校内庭球、卓球兩大會を開催す。(運動部參照)

六月廿五日 池上雄辯大會へ鈴木寬善君を派遣す。

○月〇〇日 先輩中村龍仙師の出征に際し、學院校庭に於いて壯行式を擧げ淨資を捧呈す。

六月三十日 大崎學報を寄贈さる。

七月四日 第一學期試験開始。

七月七日 七月一日の青訓記念、當日の事變滿二週年記念並びに勅語奉戴宣誓式の三趣旨に依る式典を舉行せられ、試験を一日臨時休業す。

七月十一日 第一學期修業式を本山大客殿に於いて舉行さる。

七月十八日 暑中見舞を發送す。

○月〇〇日 會計幹事鈴木寬善君出征に際し淨資を捧呈す。該部の事務は後任幹事決定まで田村幹事に依つて遂行す。

○月〇〇日 會員厚海學眞君出征に際し淨資を捧呈す。

○月〇〇日 先輩松井大周師の出征に際し祝電を發す。

九月一日 第二學期始業式を本山大客殿に於いて舉行さる。

九月四日 後任會計幹事の件に就き田村幹事高等部三年級と談合す。

○月〇〇日 會員鈴木新二君の出征に際し淨資を捧呈し、學院生一同身延驛迄歡送す。

○月○日 會員丁名塚玄格君の出征に際し淨資を捧呈し、學院生一同身延驛まで歡送す。

○月○日 祖山學院教授加藤雲洞先生凱旋せられ全學生歡迎す。

九月十二日 龍口法難會に當り道路布教をなす。

九月十五日 會計部長、高等部三年級、委員、幹事の協議の結果、天ヶ瀬寛甲君を後任會計幹事と決定す。

九月二十日 支那各地に於いて宣撫工作に活躍せられつゝあつた結城瑞光師が歸還せられ全學院生歡迎す。

九月廿六日 學院建築費寄附者赤尾元一氏の法要に全學生出仕す。

十月一日 勅額拜戴記念に際し午後八時より山門前に於いて道路布教をなす。(辯論部參照)

十月十一、二、三日 御會式に際し、十一日山門前に於いて道路布教。十二日は例年の如く、祖師堂法要奉行直後釋迦堂に於いて説法を始め、十三日午前三時頃終る。

十月十四日 蓮華寺住職佐野湛部師の晋山式に對し祝電を發す同日校内劍道大會を行ふ。(運動部參照)

十月十六日 午後六時より第十四回秋季聯合雄辯大會を身延町公會堂に於いて閉催す。會場は聴衆に滿溢し非常なる盛況裡に十一時終了す。閉會後直ちに參加學校の各辯士を梅屋に招待し、歡迎慰勞會を催して大いに驩を交ふ。

十月十七日 他校歸還辯士の歡送並びに會場の整理。

十月廿一日 秋季校内庭球大會(運動部參照)

十月廿九日 秋季校内卓球大會(運動部參照)

○月○日 先輩横山敬持師の出征に對し祝電を發す。

十一月九日 立正大學雄辯大會へ望月海順君を派遣す。

○月○日 本院大客殿に於いて學院生入營諸君の壯行式を舉行す。(入營諸君の氏名は別報の如し)

○月○日 小澤英哲、齋藤榮淳、安部東洋三君の入營に際し記念品兩端硯を各一個づゝ捧呈し、田村幹事、井上助手歡送す。

十一月十二日 映南野球大會へ出場し、五連覇をなして我が學院チームの意氣を顯揚す。(運動部參照)

十一月十六日 法苑學院の旅行生先生以下十三名登詣し、田村幹事之れが案内並びに接待に當る。

以上が棲神發行前途に於ける部業の概報である。

出征軍人に送る辭

今や聖戰も三歳に垂として興亞の大業は益々進捗し、中國に於いては既に新政權の産聲を揚げんとして力闘を續けられ、東亞の空は漸次晴雲を拂つて歡喜平和の曙光を加へつゝあるが、これ偏に忠烈なる皇軍勇士の超人間的奮戰の賜である。

茲に我が會員中より數多の應召勇士を出したることは、本會の名譽として之れに過ぎるものなく、殊に應召諸君に在つては男子無上の本懐として胸中歡喜快哉に雀躍せられて居ること、

思ふ。然して轉戦又轉戦、瞬時の休憩も無く廣野の戦塵を驅け廻つて大業達成の爲に闘へる勇士の勞苦を偲ぶ時、唯感謝と感激に胸の迫る他はないのである。

應召諸君の中には、内地に止つて陛下の忠實なる股肱として重任遂行に邁進せらるゝ人もあり、或は大陸へ渡つて火線の戦闘に加はる人もあることと思ふが、何れにしてもその精神は一つにして天業翼賛の誠を至すことに歸結する。

本會はこゝに諸君が多年培はれたる祖山魂を發揮して、大業達成に邁進せられんことを希ひ、併せて諸君の身体健全と武運長久を祈り、以て錢とする次第である。

出征軍人芳名

鈴木新二君 増田能成君
厚海學眞君 鈴木寛善君
中村重雄君 丁名玄格君
入營軍人芳名

佐野十志正君 株田詮精君
芦田定雄君 塚原玄淨君
小澤英哲君 望月六博君
安部東洋君 齋藤榮淳君

(各雨端硯一個を捧呈す、尙此處に掲載せる芳名は本十四年度のみの方にて次號へは事變始めより全部の芳名を記して以て光輝を添ふる心算です故御了承下さい)

各 部 記 事

◇會計部

幹 事 天ヶ瀬寛甲

最大限度の冗費節減をなし、其の餘剰を以て、飛躍せしめるべきを飛躍せしめるは、これ財政機構運用の妙諦である。我が國の財政方策既に然り、此の超非常時局に際し、本部に於いても亦この方策に則りしは言を俟たない。唯懺むらくは、意有りて行之れに伴はなかつたことである。

然し前幹事鈴木君の後務を繼承し、其の意志に依り、凡器に鞭打つて部業遂行に最善の努力は拂つたつもりである。

臨時出費の著しい超過に反し、會員の減少による収入豫算額の赤字は、本部の最も打撃とする處であつたが、あらゆる財政的苦難を突破して今日迄初志を貫徹することを得た。

本年度も既に終りに臨み、幸ひ大過無く部業の大半を遂行し猶澁滞無く進行しつゝあるが、之れ偏に各部長諸先生並びに幹事諸兄の御後援に依る賜にして、我が微力の成すところではない。實に衷心より感謝に堪へず、茲に滿腔の敬意を表する次第である。

◇寄附者芳名

棲神製作費トシテ

一金 壹封 法 首 猓 下
一金 拾圓也 柴 田 總 務 殿
一金 五圓也 藤 井 奉 行 殿
一金 五圓也 下 里 會 計 殿

一金 五圓也
 一金 參圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 壹圓也
 一金 壹圓也
 一金 壹圓五拾錢也

丸山 頤 孝殿
 莊司 存 忠殿
 樋口 是 端殿
 秋山 湛 秀殿
 結城 瑞 光殿
 山田 顛 存殿
 北村 義 暢殿
 麻生 是 大殿
 今村 惠 晃殿
 山田 本 秀殿
 武井 廣 通殿
 波邊 顛 照殿
 疋田 英 肇殿
 難波 智 龍殿
 芹川 要 仙殿
 樋口 水 音殿
 池上 要 輝殿
 佐野 德 造殿
 野尻 貞 一殿
 河井 直 一殿
 村松 玄 潮殿
 佐藤 瑞 覺殿
 貴家 是 俊殿

一金 壹圓也
 一金 壹圓也
 一金 壹圓也
 庶務部
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳拾五圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也
 一金 貳圓也

天野 玄 幽殿
 町田 是 得殿
 望月 堯 孝殿
 大法燈會參列者殿
 結成式寶榮殿
 平賀 寶 榮殿
 荒木 義 榮殿
 渡邊 正 教殿
 御本 山殿
 學院教師課殿
 學院校友會殿
 中村 義 明殿
 土谷 詮 肇殿
 室住 先 生
 兒島 鍊 戒殿
 蓮盛 坊殿
 渡邊 泰 深殿
 重盛 快 哲殿
 竹內 性 明殿
 芦田 智 幸殿
 宮本 龍 慎殿

文學部へ

- 一金 參圓也 小川 尊 雄殿
- 一金 參圓也 田所 英 照殿
- 一金 貳圓也 神田 義 法殿
- 一金 參圓也 池内 詮 慶殿
- 一金 貳圓也 小寺 マ サ殿
- 一金 貳圓也 中村 末 殿
- 一金 壹圓也 平田 文 殿

辯論部へ

- 一金 壹圓也 法 務 所殿
- 一金 壹圓也 村雲 結社 中殿
- 一金 貳圓也 田 中 屋 殿
- 一金 貳圓也 松 司 軒 殿
- 一金 壹圓也 平 田 屋 殿
- 一金 壹圓也 望月 寫眞 館殿

(以上二月末迄)

◆辯論部

幹事 酒井 圓通

雄辯は銀なり、沈黙は金なりといふ名句があります。併し乍ら最初より沈黙するとせば、それ單なる瓦石でありませう。

沈黙が金たり得るのは、千言萬語を連ねても到底深遠なる思想、熱烈なる心情を表現する能はざるに及んで、萬已むを得ずして沈黙するに至るからであります。

佛陀は稀世の雄辯家でいらせられた、宗祖又佛陀の本懐たる法華經傳弘のため四海歸妙、王佛冥合の大理想のもとに立正安國の大義を唱導絶叫され、「存ずる旨あり」との言を残して此の地に入山せられた九ヶ年の閑居は亦た沈黙の大雄辯であつた事は勿論であります。

而して「未來際までも心は身延山に住むべく候」と示めされた棲神の地にて朝夕行學の二道に勵む我等學徒は「二陣三陣」と宗祖の指準に従ひ命を牒して止暇斷眠の努力を續けるものであります。

その理想を實現するものは、言ふまでもなく、雄辯の力に待つ事大なるものであります。かゝる意味において我が辯論部は我等學徒の使命を果すべく耕辯會或は道路布教にと進出し、辯舌の向上に務めるものであります。幸にして宗祖の御庇護並に松木部長先生の御指導と會員諸兄の絶大なる後援によりその重責の大半を終了し得た事を深く感謝すると共に今年度の事業の跡を御報告申します。

四月廿一日 前幹事清水兄より事務引継完了。

五月六日 釋尊御降誕會道路布教並に映畫會を開催す。

所 身延町山門前廣場、辯士左の如し。

清水 文要君 細井 泰行君 田村 幹事

小林 學山君 松木 部長

映畫 身延山ニース、宗祖一代記

説明 丸山布教師、難波布教師

五月七日 同前、同所

田村 幹事 下邨 顯淨君 竹中 仙一君

武井 布教師 松木 部長

五月八日 不幸にして大雨にて道路布教開催する事を得なかつ

たが、六日は約四百人、七日は約五百人の聴衆者あり、近年

稀なる盛會であつた。

映畫布教に際しては、特に丸山布教師、難波布教師、清水君

の御盡力を深謝す。

六月十日 校内各級選出春季雄辯大會開催す。當日のプログラ

ム左の如し。

一、開會の辭 酒井 幹事

一、所 感 中學林一年 石川 忠義君

一、時局下と學生の身分 同 二年 山本 榮淳君

一、日支提携と佛教徒使用 同 三年 近藤 義見君

一、長期戰 中 四 長尾 泰治君

一、四海歸妙 中 五 黒宮 教文君

一、聖戰の本質と我等の使命 高一 池上 泰信君

一、試 鍊 高二 多賀 玄唱君

一、生活の探求 高三 永瀧 堯憲君

一、所 感 高三 株田 一男君

一、批評訓辭 部長 松木 先生

一、閉會の辭 田村 幹事

六月十五日より三日間開關會説教出仕、同宗祖御入山記念道路

布教並に映畫會を山門前廣場にて開催す。辯士左の如し。

六月十五日

酒井 幹事 田村 幹事 武井 布教師

難波 布教師

六月十六日

田村 幹事 川端 清瑞君 下村 顯淨君

松木 部長

六月十七日

酒井 幹事 鈴木 幹事 清水 文要君

田村 幹事 望月 海順君 松木 部長

例年此の六月大會は降雨に惱まされるのであるが、今年は三

日間共晴天で、毎夜四百人内外の聴衆あり、無事盛大に終了

する事が出来た。

映畫布教に際しては、特に丸山布教師、難波布教師、清水君

の御盡力を感謝す。

六月廿四日 池上學林聯合雄辯大會に中五鈴木寛善君を派遣す

演題 大法燈を掲げて

九月五日 説教草案賞費配布す。

九月十二日 龍口法難會記念道路布教を開催す。

所 山門前廣場、辯士左の如し。

酒井幹事 清水文要君 望月海順君

黒宮教文君 小澤英哲君 小林學山君

武井布教師 難波布教師

突然法首祝下の命により道路布教を行ひ大いに法益を收む。

九月廿三日 耕辯會開催

毎週土曜日に耕辯會並に説教儀式を開催す。

十月一日 勅額拜戴並に興亞奉公日記念道路布教を開催す。

所 山門前廣場、辯士左の如し。

酒井幹事 齋藤哲一君 小澤英哲君

望月海順君 松木部長

十月十一日 宗社御會式記念道路布教を開催す。

所 山門前廣場、辯士左の如し。

酒井幹事 渡邊泰壽君 清水文要君

田村幹事 細井泰行君 下邨顯淨君

望月海順君 武井布教師 難波布教師

十月十一、十二、十三日 宗祖鶴林會説教出仕。

十月十二日 通夜説教出仕。

本師堂に於て本山布教師及學生により説教が行なはれ、多數の參詣者と共に御通夜す。説教師左の如し。

丸山執事 武井廣通師 秋山湛秀師

難波智龍師 望月海順君 小林學山君

田中靜光君 清水文要君

十月十六日 第十四回秋季聯合雄辯大會開催す。

參加団体 立正大學、池上學林、立正學院、中山學林、光山

學院、祖山中學林、本化同心會、郡内青年團

當日審査員諸先生を左の如く御願す。

松木本興先生 灘上惠教先生 丸山順弘先生

難波智龍先生 長井辨順先生 原田海昌先生 以上

司法關係者御臨席。

プログラム左の如し。

一、玄題三唱 一 同

一、開會之辭 幹事 酒井圓通君

◆優勝カップ返還式◆

一、審査員挨拶 本學教授 灘上惠教先生

一、法華精神と我が國民性 祖山中學林 成田翰要君

一、我等の時局觀 祖山中學林 松原博君

一、宗教と戦争 祖山中學林 井上龍榮君

一、青年よ大和魂に生きよ 下山青年 遠藤俊男君

一、日本精神と日運上人 本學 鯉淵玄昇君

一、未定 身延青年 遠藤重利君

一、貧困を超越して 中山學林 小堀辨有君

一、未定 立正學院 有村憲善君

一、興亞と法華經

本 學 石川 是行君

一、日本精神と日運魂

光山學院 藤田 尙慈君

一、白衣の勇士を迎へて

池上學林 安部 智眞君

一、國 運

本化同心會 村田 海仙君

一、青年と信仰

本 學 渡邊 泰壽君

一、大日本青年の使命

豊岡青年 望月 幸重君

一、魂を鍊れ

身延青年 望月 織太郎君

一、身延へ詣でて

立大専門部 畑中 智恭君

一、眞實なる愛の奉仕者たれ本

立大豫科 高橋 昇君

一、亞細亞の將來

立大豫科 高橋 昇君

一、佛教の進展

本 學 武波 正芳君

一、奮起せよ日運門下

立大専門部 水江 與志男君

一、挽回佛教の社會的態度は
聖意に稱ふものなりや

本 學 下邨 顯淨君

一、人類よ如是の眞理に生きよ

立正専門部 清水 文昭君

一、日本精神は體驗に依て生かせ

本 學 望月 海順君

一、東亞新秩序建設と農奴解放

立大學部 岡部 魁君

◇優勝カップ授與式◇

一、揆 撈

辯論部長 松本本興先生

一、閉會之辭

幹 事 田村 啓孝君

一、玄題三唱

一 同

審査の結果左の五君が優勝、準優勝の榮冠を獲得された。

本學優勝 (カップ授與)

中學林三年 井上 龍榮君

同 準優勝 (賞品授與)

高等部一年 渡邊 泰壽君

他校派遣優勝 (カップ授與)

立大専門部 畑中 智恭君

同 準優勝 (賞品授與)

光山學院 藤田 尙慈君

青年團優勝 (カップ授與)

豊岡青年 望月 幸重君

廿四名の選出辯士によりて國家總力戦体制完備の指導原理を示めさんと遺憾なく熱叫し、盛大裡に終了す。尙本大會開催に際して部長先生、本山布教部、審査諸先生及び参加辯士諸君の御盡力を深謝致しますと共に當大會に際し御奉仕されし會員諸兄、梅屋旅館御主人、身延印刷所、並に當日御芳志を寄與されし諸家に對し厚く御禮申上ます。

十月十七日 例年の通り甲府市制祭特別道路布教出張の豫定なりしも暴風雨のため今年は中止す。

十一月九日 立正大學雄辯大會に高三望月海順君を派遣す。

演題 我等は如何に生くべきか

第三學期

宗祖御降誕會雄辯大會を開催す。 以上

◇運動部

幹事 竹谷 榮 靜

◇庭球部

運動部部长轟上先生を初めとし、松木辯論部長、望月觀爾先生、運動部幹事竹谷君等中心になつて往年の庭球部黄金時代を盛へ返へさんとし、年内に於ける校内大會より更に一步進みて部員諸君の技術向上を目的として第一學期に臨時庭球大會を學院コートに於て開催する等種々苦心せしも、時あたかも聖戰三年、國家物資統制、ゴム製品ボールの統制に直面し、ボールの蒐集意の如くならず、僅かに校内大會のみに使用する程度で、思ふ様に練習も出来ずに残念であつた。

然し本年四月新學期、高一に金達生、中二編入の公萬壽の二君の入部は斷然光輝を放ち、更に舊部員に天ヶ瀬、竹谷、村上等の強豪あり、明年は此の充實せし新陣容を以て、技術に精神的に、切磋琢磨し、暗雲を破して、當部黄金時代を現出し、對外的に躍進せんと部員一同意氣込んでゐる。

昭和十四年度校内大會成績

六月十八日(晴) 學院コートに於て春季校内大會を舉行す。部長先生不在の爲幹事の挨拶後、熱戦を展開す。

□紅白戦—紅軍の勝

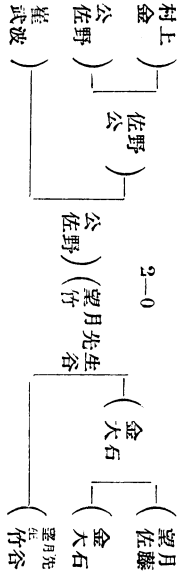
□本、厚—本山優勝

□級戦

- 一等 中二 (公萬壽) 組
 - 二等 中五 (鈴木(寛) 天ヶ瀬) 組
 - 三等 高一 (清達生) 組
- 優勝戦 (公萬壽) 組

十月廿一日(土曜日) 秋季大會開催、此の日天候曇りなるも部長先生並に松木本興先生、望月觀爾先生御來場下され、殊に大會を有意義に閉會する事が出来た。御來場の諸先生に厚く感謝す。

□紅白戦—紅軍の勝 (トーナメント式)



- 優勝戦
- 一等 公、金組 (優勝旗授與)
- 二等 崔、金組
- 三等 村上、佐野組

◆剣道部

一月二十八日 一週間寒氣を克服し心身鍛練に努めた剣道寒稽古の發表日なのだ。二十數名の劍士、皆元氣旺盛寒氣も何のその午前九時より試合開始さる。成績次の如し。

□紅白戦 勝—白軍

□高点試合

一等 鈴木(新) 二等 芝田 三等 前田

□優勝戦

優勝 株田 二等 望月 三等 増田

時正に東亞新秩序の秋にあたり、日本精神發揚と相俟つて國民舉つて体位向上を叫びつゝある現今、劍道こそは其の精神の強固、身体の剛健を計るに最適のスポーツである。先頃機敏駿劍を以て我劍道部の重鎮たりし加藤、日野兩兄を送り、いさゝか部として寂しい感あるも、茲に新星渡邊君を迎え我部も實の充實を見たのである。渡邊君の駿劍は驚歎に値するものあり、秋期大會は多數劍士の参加を得、盛會裡に終了した。左に其の戦績を記さん。

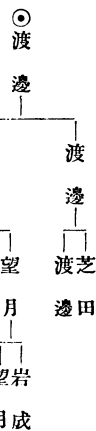
□紅白戦 勝—紅軍

□リーグ戦 A組 一等芝田、二等岩成

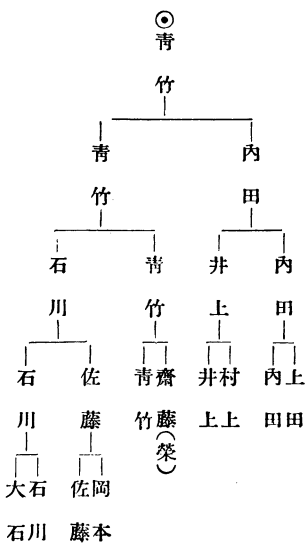
B組 一等村上、二等井上、三等内田

□トーナメント式

A組 一等渡邊君、二等望月君



B組 一等青竹君、二等内田君、三等井上君
四等石川君



此の秋期大會に特に感じた事は劍士諸君がよく武道精神を理解され終始一貫眞面目であつた事である。尙此の日審判を株田師に煩はした事を感謝する。
今や我國は支那事變處理に邁進してゐる秋、先には畏くも勅語を下し給ひ吾々青少年學徒の進む可き道を示されました

吾人は此の理旨を奉体し益々學に行に精進すべきである。
 我劍道部は去る五月初旬初段三人、一級二人允許さる。我等は益々技を練り精神を作り破邪顯正の劍、降魔の劍を掲げて國を護り法を護る爲め努力しよう。

來春二月昇段劍道大會あれば進んで選手派遣の豫定なり。
 諸君よ！ 國家社會は今堅忍不拔實剛健なる若人を要求してゐるのた。一層心身の鍛練に邁進されん事を希望して筆を擱く。(T生)

◆卓球部

過去數年隆盛の一路を歩み、祖山卓球部の名は峽南に或は山靜に咲き誇り、無人の境を行く如き感があつた。本年も亦た強豪の鈴木(新)、増田の二君、部の中堅として後輩の指導に、又對外の進出に意をそそぎ、萬全を期してゐたが、日本男子としての本懐、晴の應台に勇躍増田君は先立ち、又鈴木新二君、鈴木寛善君等後を追ひて大陸に、東洋平和確立の銚を執る身となつた。當部から三兄を失なつた事は部の前途に一抹の不安を感ぜしめるものがあるが、然し當部に於て鍊磨した身体精神に依つて聖戦に参加出來得た事は、体位低下の本學に於て最も誇りとし、兄等の戦功と武運とをお祈りするものである。三兄を遣りし後の部は昔日の面影はないと言へ、新鋭高宮、村上、崔君等能く當部を守り、祖山卓球部の前途に躍進の二字が約束されてゐる。本年は内的に充實を計らんとしたが、校舎の一部改造に依りて部の生命たる練習場がなくなり、悪條件の内一ヶ

年を送つてしまつた事は返す返すも残念であつた。
 然しながら消息通の言に依れば、近々中に校舎新築の由でその曉には廣大なる練習場を設け、内外共に充實を期さんとしてゐる。

本年度大會成績

本年度大會は人員不足練習不足で見ざるべきものがなかつた。只十月二十一日秋季大會に於て村上君の成績は特筆すべきでトーナメント、リーグ戦共に優勝せり。以上

◆野球部

五月四日 山梨日日新聞社主催、縣下軟式野球大會南巨摩、西八代豫選に出場。(増穂小學校にて)

鰻澤	7	A	0	祖山						
谷木	波	竹	原	田	田	邊	石			
メンバー	竹	鈴	武	青	梅	内	永	門	渡	大
メン	8.2	6	5	1	7	2.4	4.8	3	9	9

新チーム編成後間もない爲、各自がその位置になれず、其の上打撃の不振の爲惨敗した。

其後試合を避け、山深い處で、ひたすら自己の技術の練磨に努めた。

第十回峽南野球大會

本年度の成果を此の大會に表はさうと部員一同頑張る。
 十一月十一日 晩秋の、然も曇天で可成りの寒さを感じる中で

各部記事

第一回戦を行ふ。

祖山 12 3 2 4 A 21 A
 身中通學生 0 0 0 0 0 0

敵投手の無制球と、何等威力のない球力を見越して、選ぶべきは選び、打つべきは打つて榮勝した。

祖山 身中通學生

投	青竹	25	打數	15	池上	三
遊	淀川	11	安打	0	山口	中
左	梅原	0	犠打	0	深澤	一
左	山野	15	盜壘	2	仲龜	左
捕	武波	3	三振	9	佐野	右
右	竹谷	15	四死	6	都築	捕
右	大石	15	刺殺	12	澤木	二
三	村上	3	補殺	5	佐野	投
二	内田	2	失策	2	中込	遊
中	辻					
一	渡邊					

十一月十二日 午後一時より、優勝戦が開始された。空はよく晴れわたり、氣持がよい程の小春日和である。

市川大門 0 0 0 0 0 0 0 0 1 A 1 A
 祖山 0 0 0 0 0 0 1 A 1 A

此の試合に、青竹投手の調子極めてよく殆んど三振に打取つて、實にその數十八に達し、許した安打二、四球なく、敵走

者の三壘に達したものの二人、然もよくその後を引締めて遂に得点を許さなかつた。

此れに反して、最初より敵投手の緩球をねらつて、四球と安打に度々走者を出したが、此處ぞといふ時に一安打がなく、隨分押し氣味ではあつたがスコアの上では均等を保つて、最終回に入つた。

先づ打つた敵が、失策と安打で三壘に来て、猶一死であり我軍の危機來るを思はせたが、無事切抜けた。

代つて、一死後、青竹堀越し二壘打に出て、セカンドに頑張つた後、淀川の三壘ゴロを三壘手一壘に低投し、後に轉々とする間に還つて、又今年も制覇を遂げる事が出來た。

祖山	市川					
投	青竹	26	打數	24	畑川	捕
遊	淀川	5	安打	2	青沼	兄 二、右
左	梅原	0	犠打	0	小池	遊
捕	武波	4	盜壘	3	小林	中
右	竹谷	6	三振	18	一瀬	左
三	村上	3	四死	0	名取	一
二	内田	21	刺殺	19	三神	投
中	辻	2	補殺	9	篠原	右、二
一	渡邊	1	失策	3	青沼	弟 三

猶、灘上、望月兩先生、竹中、守山監督、竹谷コーチが終始一貫我達を勵まし、指導下さつた事を厚く感謝致します。又森

田、青柳兩兄がスコアを記して下さると共に、陰より聲援を惜しまれなかつた事も、私達として忘れる事の出来ない事です。

本年度打撃成績表

選手	打數	得点	安打	打壘	打壘	盗壘	振死	打撃率
武波	8	4	5	6	0	4	0	●六二五
青竹	10	5	5	7	0	4	2	●五〇〇
梅原	9	1	3	5	0	1	2	●三三三
渡邊	6	3	2	5	0	1	1	●三三三
村上	5	2	1	1	0	3	2	●二〇〇
辻	6	2	1	1	0	1	1	●一六六
淀川	7	3	1	1	0	5	0	●一四三
内田	6	2	0	0	0	2	2	●〇〇〇
永田	3	0	0	0	0	0	2	●〇〇〇
鈴木	2	0	0	0	0	0	1	●〇〇〇
大石	1	0	0	0	0	1	0	●〇〇〇
山野	0	0	0	0	0	0	1	●〇〇〇

部員の横顔

武波捕手 入学以來終始一貫本壘を守つて呉れた君とも、今年限りで別れなければならぬ。常に他の部員より先にグラウンドに表はれ、撓まず、獨り研究を續けて行つた。不振だつた打撃も其の爲芽をふいて、首位打者になつた事は我々が見習はな

ければならない。

梅原左翼手 矢つ張り、いざとなると打つね。貫録がある事學院一だ。何と云つてもあの身体が物を云ふ。

青竹投手 今年を踏台に、來年は大投手にジャンプして貰ひたい。我々一同切に其れを望んでゐる。慢心しないやうに。

辻中堅手 來年もセンターにチームの重しのやうに頑張つて貰ひますかな。

渡邊一壘手 ともかくプレーに元氣があつて、我々を楽しませて呉れる。

淀川遊撃手 栗鼠のやうな君には、一段の確實と氣強いプレーを望む。

内田二壘手 そろ／＼打撃も當つて來さうですな。

村上三壘手 君こそ奮張れば、大型の選手になれるんだ。細かい技術に氣をつけるやうに。

大石右翼手 同級村上君に負けないやうに。

山野右翼手 ともかく今年は小さくて、出れば人氣があつた筋のいゝ事は認めてゐるぞ。

附記 長谷川、宮本先輩は色々と御配慮下され、殊に長谷川先輩には春の青柳遠征に多大の御援助下され、且つ映南大會に最後迄私共を勵まし、遂に五連覇の偉業を達成出來得たのも氏の御蔭にて部員一同厚く感謝す。

以上の如き成績にて本年の各部の大會終了す、剛健なる精神

は剛健なる身体に宿る」「學問より先づ体位」、我々は常に剛健なる身体を養成する事に依つて眞の國民となる事が出来るのでなからうか、剛健なる身体の主が國防の一戦に立ち、不健康なる者は病魔と戦ひて一生を終る。この二者の開きは如何に大きいか、我々は僧侶の二字に依てとかく運動を度外視してゐるのではなからうか、此の僻見を打破し眞にスポーツ精神を養ひ率先「体位向上」を唱導し、熱と氣魄を以て終生を生き通し、永遠の若人たりたい。(T生記)

關西 旅行記

日 程 昭和十四年五月 自二十五日
至二十九日

コース 身延山—名古屋—龜山—二見—伊勢—法隆寺—奈良
—大阪—京都—比叡山—熱田—身延

一行人員 中五、高三、三十名
引 率 鹽田義遜先生、望月觀爾先生

棲神閣前庭に一同參列、出發報告の式を終へ、柴田學監殿より今回の關西旅行は、第二の宗門を背負つて立つべき青年僧侶として、佛教の盛衰興亡の地たる關西佛都の見學を將來に役立たしめる様、唯歴史的による所の伽藍の廣大を見に行くのでなく、昔日の教義が如何なる影響を社會文化の上に及ぼして居る

か、又今日如何に行はれ居るかの根本的なものをとらへて來るやうとの訓話あり。鹽田先生、松木先生よりも其れ〱佛教都市見學に際しての心組に對する御注意あり。

一行は鹽田、望月兩先生に引率されて、棲神の御山身延を後にして關西への旅に出づ。國防色に塗り替へられつゝある身延橋を渡りて車中の人となる、時に十二時三十分なり。

朝は僅かに青空を見たるも雲は垂れ込めて壓せらる思するも内船邊にて一寸日光を見る。此のあたりより大變雲薄らぎて若葉の香り車中に流れ込みて初夏の味格別なり。垂れ込めたる雲の爲に富岳の容姿を眺むる事出来ざりしは残念なり。

東海道線乗替、日本三急流の一たる富士川を渡る頃には天候回復し右手に實相寺をはるかに眺む、蒲原あたりは早くも春の取入をせる所あり、身延附近との相違甚し。清水驛手前にて靜岡途中下車を中止し一路名古屋へ行く事に決す。清水港には、イナヅマ、イカヅチ、等々驅逐艦を認む。日本平を左手に眺めて汽車は一定の音律を以て進む。天龍川を過ぐれば田の耕作等に目立てり。靜岡縣一帶の有名なる茶畑は列車の進行に隨て展開す。新設工場のすごさは事變下にある日本工業躍進を物語るに足る。濱松あたりにて陽光無し、一行は大部旅行氣分にひたり居る様子なり、學生生徒の通學生乗降者の爲に混雑を極む。濱名湖巡の發動船も可愛い姿を休めいたり、行き交ふ列車超滿員種々の思を乗せて進む。空に流れる雲の一线黄色を呈し豊橋驛あたりより暮色立込め始めたり、時に五時四十五分なり。停車

中ホーム點燈せり、六時二十五分一般民家の點燈せり。田畑に働く農夫の姿を見れば銃後全く堅し。所々に立つ日の丸、軍歌を歌ふ少年、萬歳をさげぶ子供のいぢらしき。

次第に空が赤色紫桃色と濃度を加へ暗黒色となる、大府あたり全く暮色一色塗りとなれり。

名古屋驛にて下車、人員異常なく八時十分前散開、九時半集合の事、十時十分全員無事車中に乗込む。之より龜山行なり。

大變客少なき故一車輛に集まる學生の朗かき格別なり、不定期列車のなき故殘念だが致し方なく龜山驛前にて一泊す。

第二日目、龜山發四時五分なり。松阪驛にて太陽を拜す。二見ヶ浦にての御來光を列車の時間變改により車中に拜すは殘念だが致し方なし、二見驛着五時三十二分、二見が岩着六時、七時十五分電車にて伊勢内宮へと向ふ。ざくざくと玉砂利を踏む音以外に聲なし。行き交ふ人の姿が皆嚴格だ。五十鈴川の清き流れに望んで心を清め御手洗水に手を清めて神前に詣で、瞑目した時思ひ出さるゝは今を去る七百年の昔宗祖上人が「南都」「高野」「浪華」と探るべきを探り、討ぬべきを討ね竟つて、濁つた叡山を後に出でられたは建長五年の春であつた。

精進潔齋して神路山峰のあらしも澄みわたる、天祖の御座近く、默禱祈念せられ神に吾志を冥奏せられしは何か、云ふ迄もなく「日蓮によりて日本國の有無はあるべし」の抱負にして意中深く藏せられしは

我れ日本の柱とならん

我れ日本の眼目とならん

我れ日本の大船とならん

の三大誓願に外ならないのである。

此の事を冥想の中に思ひ出して宗祖の誓願の萬分の一にもあやかりたく、非常時日本に生れ來つた不肖の身が祖願の一天四海皆歸妙、法妙傳弘の一助ともなればと思ひ決するのである。

七時五十分電車發、山田發七時三十分、明野ヶ原飛行場を右手に眺めて進む。天氣快晴なる爲練習機を認む、車中にて辨當を食す。拓植を過ぎて新堂に到れば田は耕作せられ、所々に植付のすみたる所ありて田の面に陽光輝き一層美し。笠置山（海拔二百九十八米）木津川の流に姿を浮ぶ。法隆寺驛着、其れより徒歩にて法隆寺へ向ふ。一時に五分前着、先輩山田師の出迎を受く。拜觀三十分、往昔の盛なりし形骸を止めるのみ古代宗教の遺物が唯衆人の見物材料となり信仰的對象となり居らず現代の社會的の見地から見て社會に及ぼす影響なきを悲しむ。丁度西園堂に於て法要あり一釋尊降誕會一なり、之又御座なり式にて活氣なし。聖德太子當時の大なる佛教流布を以て衆を濟度せられし事より見てあまりにも形骸のみ止まり居る事痛切に感ず。唯歴史的に當時の佛教文化の寶物を示したり。伽藍云々を以ては到底現代非常時の衆生救済には用をなさぬ事は衆人すら悉知の事、之の舊弊を打解して現代に即應する所の改變を行つては如何と思ふ、其の時こそ聖德太子の願行が現代社會に延長せられるのではないだらうか。

徒歩にて驛着二時十分、二時三十分發にて奈良へと向ふ。大佛館へ荷物を置き三時半より各所參觀をなす、此處にも往昔の佛教文化が残した遺跡は数かぎりなく各所に散在す。大佛殿參觀、屋上鴟尾金色に輝く、次に戒壇院、大湯殿、大鐘堂、二月堂、三月堂と昔日のきらびやかさ思ひ出さる。五時十分若草山へ到着。此處にて休息し五時四十分春日神社へ向ふ。

赤塗りの堂宇夕陽に照り、堂宇配置の美に感ず。配列美と云ふか石燈籠の数かぎりなく續く參道を過ぎて旅館へ參觀に疲勞した体を運ぶ。

二十七日(第三日)は全く氣持のよい日本晴中、六時朝食七時十四分大坂行に乗る。五月晴のすがすがしさの中を進みて天王寺驛へ着、先輩諸師の御出迎に及び恐縮す。諸師の案内にて天王寺へ參拜す。

金堂は惟古天皇の元年聖德太子十四歳の御時物部氏討征の成就の時建立する事を約せられて出來たるものなり、伽藍は法隆寺より先に建立せられしものと云ふ、徳川時代戦亂の爲焼拂はらる、後六回の復興ありしとの事、昭和九年五重塔及中門が大風の爲倒潰し現在復興中なり。

書院に案内せられて天王寺の由來につき説明をして頂き往昔の天王寺の社會的救濟事業は國家的に行はれ居りし悲田院施藥院も時代の變遷により中絶し居たるも聖德太子の宿願の萬分の一もと思ひ現在は天王寺の資源の許す範圍に於て教育、病院等の社會事業は續行して行き、時代に即應したる宗教たらしめる

考であるとの御話を聞き他山の石、以て心に止むべきだと感ず茶菓を頂きて大替鐘、寶物殿等參觀し門を出ず。

大阪城參觀、天主閣より市中を見渡し四百年の昔豊臣公が天下を平定して居城をこゝにかまえて閣上より見渡した時の思や如何に、幾何もならずしてこの金城湯池も其の甲斐なく遂に破れて徳川の勢力下に置かれし時の殘心のや如何に、實に恐るべきは獅子心中の虫なる事を思はさる。

大阪學友會よりの御志たる晝食を頂戴し三時五分大坂出發京都へ向ふ。櫻井の驛、男山、桂川を車中より眺めて進む事三十分にて京都着、光山學院の方々の出迎を受け、次いで次の場所を案内さる。東本願寺、西本願寺、龍谷大學、圖書館見學(現在二十七萬餘の圖書を藏す、五十萬餘を藏する可能性ありしと聞き及ぶ)

四時五十分本國寺着、國寶の一切經藏本堂前にある、書院に通され茶菓の饗應に接す、五時四十分東寺東門前にて下車、諸堂宇の拜觀、夕闇迫るも豫定のコースだけとは思ひ六時二十分電車にて八坂神社へ向ふ。丸山公園通過の折點燈す、知恩院拜觀、甚五郎の忘れ傘を見る、平安神宮遙拜後三條通りいろは館へ一日中佛教文化の粹を眺めてつかれた身心を運ぶ。

二十八日(第四日)午前七時旅館出發一路比叡山へ向ふ。日蓮上人が當時佛教の大道場たる叡山へ傳教大師の高風を慕つて登られし叡山へと、電車ケーブルの便よく四明嶽着八時四十分、徒歩にて高祖谷驛へ、空中ケーブルにて延暦寺驛着、九時

四十五分阿彌陀堂通過、戒壇院え十二間四面の建造物なり。十時二十五分大講堂に到る、之の間口一―一尺奥行六九尺なり。老杉の間を通り根本中堂に到る、傳教大師道場を此處に造立し國運の振興、佛法の隆盛を祈り給ふたり。日蓮上人は傳教大師の總べてを肯定せられ、傳教大師こそ日本に於ける佛教の最も正しい傳道者として尊敬せられたるも聖人當時の比叡山は傳教の山にあらずして眞言の山、傳教大師の法統は絶へて、慈覺大師の末流のみが続いてゐたのだ。傳教の法華經主義が二代の義眞まで正しく三代慈覺に至つて遂に比叡の山は權實雜亂の山とはなつたのである。この眼前の雜亂を睥睨しながらも専心に傳教、天台を通して法華經の正意を知り、釋尊の本領を通して全佛教を中心的に統一する教學の建設に進まれる事十二年、遂に學ぶべき一切を完全に終つて、いよゝゝ濁つた叡山を去られたのだ、説明によると根本中堂正面の三燈は點じ給ひてより一千百五十幾年消えし事なく輝き、之よりも輝き續くであらうと、而し三燈は消し事なく輝くとも法統は僅か三代にして濁れ輝く事はないのだ。

天皇の御座と藥師如來の須彌壇とは同一高さなり、鎮護國家の祈禱を行ふ所は一丈二尺の下段なり。

中堂前にて記念撮影をなし中堂驛へ向ふ、こゝより琵琶湖は一望の中に眺めらる、當所海拔二、六〇〇尺との事なり、ケーブルにて坂本驛着十一時五十分、日吉神社へ十二時到着参拜す。特に目立つは鳥居の形珍らし、日吉神社より傳教大師誕生地生

源寺を傍に見て坂本着十二時二十分、晝食をなし驛發一時二十分、京都三條着二時三十分、四海唱導妙顯寺へ三時二十分着、茶菓の饗應に接す。本山妙覺寺を過ぎて金閣寺へ向ふ、天候大變悪くなりし爲金閣寺參觀を以て佛都京都の巡拜は終りとなす十一時三十分驛集合豫定にて其れ迄自由行動とす。

二十九日(第五日目) 午前〇時五十七分東山三十六峰靜かに眠る京洛の街を後に車中の人となる、熱田驛下車五時四十五分徒歩にて熱田神社へ参拜、社は今工事中なり、驛にて朝食をなし八時二十五分發列車にて窓外に展開する風物を賞す。〇時五分靜岡着三時半迄自由行動、三時三十一分發にて富士へ、之が東海道線の最終コースなり、身延驛着五時五十五分、一行無事に感激感謝又は爆笑哄笑を乗せて自動車は三門へ到着、玄題三唱し無事歸山を奉告し散開す。

終りに今回の旅行に對し大阪寺院の御高配、先輩諸師の御盡力並に京都寺院先輩諸師の御盡力により旅行目的が萬全を期し得た事を厚く御禮申上る次第で御座います。

紙數に限り有る爲タイム旅行記になるを残念とす、佛都旅行に對して特に感ぜし事は現代の宗教家としては時代に即應する宗教たらしめ社會文化の上に及ぼし幫助すべきであり、然る時に始めて舊弊は脱せらるのである、我々は本宗の教義の低觸を來さない限りは、大法弘通の一助になる事なれば感化救濟等の公共事業、社會教育等に手を伸すべきである事を感じず。

(S・K生記)

◆文學部

幹事 杉山寶淳

聖戰此處に數えて四ヶ年、皇師の大旂普ねく彼地に翻り、蔣政權の根據又遊牧の民の水草を追ふて彷徨へる如く重慶へ、昆明へと抗日の夢將に滅びんとしつゝある秋、アジア永遠平和の基礎確立の爲に、一億同胞が戦線と銃後を一貫して叫ぶ長期建設の聲を聞く。

一度眼を轉じて西歐洲の空を望めば、九月一日獨波開戦によつて所謂第二次歐洲大戰の火蓋は切つて落され、瞬間に之を併呑し、洋の東西に人類相剋の歴史は操り擴げられて行く……。然して凡そ戦争なるものが必然的結果として生み出す處のものは何か？ そは悲惨無上なるあらゆる文化の破壊である、と同時にその建設である、破壊前のそれよりもより一步理想的なる文化の建設である、再出發である。

吾人が此の綜合文化の一分科として、文藝を高揚し、強いて表現せんとするものは、古今の歴史を通じて各々その時代に最も適應せる指導原理としての文藝でなくてはならぬ。

此の意味に於て今次事變の齎らした戦争文學の最高峰を行く火野葦平の「兵隊三部作」のその如きは例へそれが他の部門（文化）の上から如何に批判されやうとも、確かに現在を超越した即ち破壊と建設の中間へ突き進んだものであつたからこそ一大反響を呼んだものである。

扱てわれ等が生活する宗教界に於けるわれわれの究極の使命

は何かと問へば「聖者日蓮の流れを汲む一般人類精神界の指導者たらんとする者」と答へるであらふ。勿論それには違ひ無いが物質を離れた此の世界の指導者たらんとする吾人の理想に到達する迄には、餘りにもその實現が困難にして且つ中途に挫折する者の多き觀を深ふするものである。

此處に於て吾人はその理想とする處の精神界のリーダーたらんとする道程に於て大聖人の「力あらば一言一句なりとも語らせ給へ云々」の前提として先づ時に應じ機に與へて覺醒せしめ得る程の迫力を持つ宗教的文藝作品の完成を急ぐ可きであるまいか、而して之を以て舌端三寸に載せて世人の耳根に訴へ或は沈黙して眼根に訴ふれば、とりも直さず自ら究極の理想へと向上して行くものと信じて疑はない。

斯く考へ來つて祖山の文藝が此の模神によつてその体面を保つものとすれば個々の學生が餘りにも没干渉的ではあるまいかこの意味をよく吟味してじつと「作品集」を見られよ……；只徒らに骨董的に墮するでもなく、かと云つて單なる序述的作文集に止まるでも無く、願ふ處はより良心的文藝あるのみ。（杉山記）

◆文學部へ寄贈圖書

大崎學報	摩訶衍	京都佛教專問學校殿
立正史學	信人	松楓居殿
立正大學學研究室殿	求道	求道園殿
立正大學史學會殿	山柿	山柿會殿
叡山學報	其他	新聞雜誌等
比叡山專修院叡山學會殿		